

国際人を 目指して 県立大生セブ島研修

□中□

「授業はどうだった」「まあまあできたよ」9月中旬の夜。蒸し暑さが残るフィリピン・セブ島。県立大経営学部国際経営学科の学生は研修を終えて宿泊するホテルに戻ると、現地の従業員と談笑を交わす。ロビー

通じなくても前向きに

応用

は、さながら即席の英会話教室のようだった。

「機会があふれているのに、部屋に閉じこもるのはもったいない」。竹本拓史さん(18)は、ほぼ毎晩ロビーに繰り出した。TOEICの点数は740点で、学科が卒業要件に課している730点をクリアしている。それでもセブでは「現地の人に英語が通じない」と悩んでいた。

転職経験があるホテルマンと「今と昔の仕事の比較」を話題にしていたときのことだった。給料を意味する「salary」の単語がどうしても



宿泊先のホテルロビーで、現地の従業員と談笑する竹本さん(右)＝フィリピン・セブ島、ベイフロントホテル

通じない。「money」(お金)など、単語を補いながらようやく分かってもらった。

「テストの点数と語学力は別問題。発音やコミュニケーション能力を含め会話を成立させる力に身に付けないといけない」。竹本さんは、あらためて課題に気付いた。

◇ 学科1年生のTOEICの平均点は、入学当時402点だったが、7月までに638点にまで伸びた。3週間のセブ研修では「100点または1割アップ」を目標に設定している。

研修の効果は勉強面にとどまらない。授業の合間には「フレンドリーで陽気」なフィリピン人講師から、生活習慣や文化の違いをじかに学んだ。

現地でしか通じない「隠語」を教えてもらった学生もいるなど、大いに刺激を受けていた。

研修場所となったイデア・アカデミアは2015年に開校。6〜7割が日本人学生だが、アジアや欧州からの留学生もいる。将来的には「もっと国際色を豊かに」と考えている。

北林美幸校長は「外国人と接する上で、バックグラウンドの違いを理解することは大切。日本では体感できない、さまざまな気付きを持ち帰ってほしい」と期待を込めた。